

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100055		
法人名	流通商事株式会社		
事業所名	グループホーム ゆうゆう黒川		
所在地	盛岡市黒川7地割37-8		
自己評価作成日	令和5年12月5日	評価結果市町村受理日	令和6年2月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年12月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者さんの尊厳を守り、思いを大切に、安心な暮らしができるように努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

国道396号線から山手に入った小学校、保育園、公民館、住宅等が集まったまとまりのある地域に平成19年に民家を改修して設置されたグループホームである。認知症が軽度で介護度も低い利用者が多く(7名中介護度1が5名)、一人一人の利用者が自分の思いや希望をかなえながら暮らせるよう職員は一步下がって支援している。施設は生活しやすいように工夫されており、利用者は、やや手狭なホールで、時には大笑い、時にはぶつかり合いながら、賑やかに暮らしている。食事を利用者皆で用意していることは特筆され、3日に1回は食材の買い出しに職員に同行し、食べたいものを選ぶなど、その主体的な活動は自立支援を目指すグループホームの一つの理想形である。職員はこれらの活動を見守り、支える役割を担っており、自立度の高い暮らしを継続するため、利用者の日々の思いや意向を的確に捉えるよう努めている。また、以前の地域との繋がりを回復すべく、地域との交流にも力を入れたいとしている。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいの				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

「評価機関、特定非常勤活動法人」いわての保健福祉支援研究会

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	月1回の会議で確認しているが、理解度に差がある。職員間の話し合いが不足している。	「利用者の尊厳を守り、提案や助言をしながら、自分で日々の暮らし方を決めてもらう」ことを運営理念としている。手をかけて心身の介助を行うことを介護とする考え方に捉われず、本人の思いや意向を尊重し、本人のペースに合わせた暮らし方ができることを基本とした運営理念の意味するところを職員会議等で共有するよう努めているが、話し合いが足りず、共通理解までには至っていないとしている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	公民館の鍵がホームにあり地域の人が使いやすいようになっている。近所の無人販売で買い物、野菜や果物のおすそわけを頂いたりしている。両隣の方とは交流があるが、地域全体・日常的という観点からは不十分である。	開設以来地域に馴染んだ暮らしを続け、自治会の公民館祭りへの参加、中学生等によるコンサート、御神楽、地域の伝統さんさの観賞、玄関前で近所の皆さんとバーベキューを楽しみながらの都南花火大会の観賞など、地域とは活発な交流が続いていた。それもコロナ禍で一変し、地域との付き合いが止まってしまった。こうした中でも、両隣の方からは野菜や果物の差し入れがある。今年は公民館の夏祭りが再開され、地域の活動も復活しつつある。ホームでは公民館の鍵を管理していることから、公民館行事への参加を中心に、地域との繋がりを回復できるよう取り組んでいる。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の力を活かした貢献はできていない。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居状況、事故報告、運営状況等の報告が主であり、サービス向上の為の意見聴取が不十分である。職員・家族の参加の機会も十分ではなかった。	昨年10月から参集しての会議を再開している。利用状況や運営状況等の報告をもとに、ヒヤリハットや事故への対応等について意見交換している。民生委員、近隣の方、特養等を運営する他法人の在宅介護支援センターや地域包括支援センターの職員が委員となっている。利用者7名中、6名が成年後見制度を使っており、家族の参加は難しい。今年10月の委員会は避難訓練と同じ日に開催し、委員にも参加いただき、利用者の暮らしの様子や施設設備、住環境等に理解を得た。	地域との日常的な繋がりのあるホームであり、自治会、消防団、警察の駐在所、老人クラブ、保育園等の多様な人材の委員に就任に向けた働きかけを期待します。会議には、所長(管理者)だけでなく、職員も交代で書記を担当するなどして、会議に参加することが望ましいと考えます。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	生活福祉課の担当者とは日頃の状況等連絡をとり協力関係は築けている。	成年後見人に加え、生保受給者も5名おり、市の関係課との連携は欠かせない。所長(管理者)のみならず、職員も市の担当職員を訪ね、情報交換を行っている。市の生活保護担当ケースワーカーが半年に1度訪問調査に来る。地域包括支援センターの職員からも運営推進会議を始め、様々な場面で指導、助言を得ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	理由のない制限は行わず、身体拘束を行わないケアは実施できている。	「身体拘束適正化検討委員会」は職員全員で構成し、現在は2ヵ月毎に職員会議の終了後、開催しており、研修会も半年に1回は実施している。よく転ぶ利用者1名が離床センサーを夜間に使用している。行動制限やスピーチロックの対策も職員同士で確認し合い、研修テーマにもしている。夜間を除き、日中は施錠せずオープンにしている。日中外出する人が2人おり、一人は時々かなり遠くまで歩くことから、職員が見つからないよう後ろから見守り、ついていくようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修は未実施であるが、理念の理解に基づき防止はされている。所内で虐待が疑われた時の対応、不適切ケアの勉強会は定期的に行い防止に努める必要がある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	尊厳を大切にしようという理念の基、サービスにおいて権利を擁護することにつなげているが、制度の活用については管理者が必要に応じ関係機関等と相談している。職員が実例を交えて学ぶ機会が必要である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の時はできるだけわかりやすく説明している。変更になった重要事項についても説明し理解を頂いている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来て頂いた時にアンケートをお願いしてるが、面会の機会が非常に少ないことも重なり意見は寄せられていない。	自分の考え、意見をきちんと言える利用者が多く、じっくり話を聞きながら希望や意向に添えるよう努めている。成年後見人の意見を確認する時もあるが、家族から意見を聞く機会は少ない。家族来訪時の「訪問記入欄」に「アンケート欄」を設けるなどの工夫もしてきたが、来訪者が少なく機能していない。請求書を送る際に、1か月の生活の様子を簡潔に書き添えて、意見等を寄せてもらうよう伝える工夫もしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議で意見や提案できる場を設けており反映する場合もある。	所長(管理者)は、職員会議やミーティングで職員の意見や要望を聴取し、予算化が必要なものは所長会議に諮り決定している。また、本社の介護担当部長が3グループホームを3ヵ月毎に回り、職員と個人面談を行い、処遇や運営等について意見交換を行いながら提案や要望を確認している。会社では人事管理制度や目標管理制度を導入し、職員の資質の向上に力を入れるとともに、職員の研修要望に応え、3グループホームの職員交換研修や外部への派遣研修を実施するなど、職員の資質向上に力を入れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は定期的に訪問し勤務状況を把握している。その際、管理者・リーダー・職員と意見交換をし職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は一人ひとりの能力を把握している。代表者は今年度、介護部全員に対して研修を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部の研修・実践者研修の補助等で同業者と交流する機会はあったがネットワーク作りは行っていない。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の思い、やりたいことなどを主に、その人が望む暮らし、必要と思っていることをまとめながら安心して過ごすことができるように努めている。利用開始前に自宅へ会いに行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	希望や要望をお伺いして関係を作るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	希望や思い大切にしながら、それまでの暮らしや身体の状態に応じて支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者さんの暮らしを支援する役割が主であり、暮らしを共にする者同士ではないため、利用者さん主体とする支援者としての関係を築く取り組みをしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	感染症の影響もあり、直接会って話す機会が極端に少なく関係性は十分には築けていない。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	機会は多くはないが、感染予防しながら馴染みの場所へ出かけられるような個人の計画も作り支援している。	日常の関わりの中で、馴染みの人や場所を聞き出し、希望があれば訪ねてみる機会を作るよう努めている。かかりつけ医への通院は、知人、友人等の馴染みの人との再会の場にもなっている。また、来所してくれる地元の伝統さんさの太鼓と踊りは、馴染みの芸能文化になっている。コロナ禍以降、利用者、職員にとって、野菜等の差し入れをしてくれる両隣の方が一番のお馴染みさんになっている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士で相談して料理できるようにしている。利用者さんが一人の場合は職員が一旦関わり他の利用者さんに関わり易くなるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後の関係性は保てていない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の思いを大切にしたい計画が中心になっている。意向の把握が難しいときは、ご本人本位に考え不利益がないように努めている。	利用者のうち2人を除き、暮らし方への希望ややりたいことを話してくれる。一人一人から思いや希望、やりたいことなどを丁寧に聴取し、センター方式の「私の思いや希望(暮らしの計画)」の記載様式にまとめ、介護計画作成の基本資料にしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	してきたこと、したいこと、いきたい場所、会いたい人を含め、どんな暮らしをしてきたかをできるだけ知り共有し支援できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	お一人おひとりの自由を乱さないようにしながら、思いやお身体、どのように過ごしたいか？過ごしたか？をわかるように記録し共有するように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全職員から利用者さんの現状を記録に書き出し、ご本人さんの思いをできるだけ確認しながら計画を作っている。計画の振り返りも全員で行っていて次につなげている。	利用者の思いや願いを叶えることを最重点に、計画作成担当者が利用者から聴取した「私の思いや希望」をもとに、「暮らしの計画」(希望することについてどうしたいか、希望をかなえるために寄り添うことは、いつ、誰がといった視点で)を介護計画の基本としている。「どうなったかの振り返り」記入欄も設け、3ヵ月毎に全職員でモニタリングを行い、6ヵ月で計画の見直しを行っている。その間、利用者の思いや願いが変わったり、増えたりした場合は、適宜、計画を見直すようにしている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者さん個人の記録と日誌で共有しながら、計画の振り返りを行っている。計画作成者は得た情報を見直し時に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	この1年、特別なことはないが、必要があればできる限り柔軟に支援をする方向である。□ □		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	豊かな暮らしを送るための前提に、その人の普通の暮らしとして、関わってきた場所や人も大切にしながらの支援を基本としている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院は希望する病院を優先しているが、病状などにより別をお勧めする場合もある。	以前からのかかりつけ医を受診している利用者が多い。通院には職員が同行している。利用者にとっては、外出するよい機会になっている。訪問診療を受けている利用者はいない。訪問看護ステーションの看護師が週1回来所し、利用者の健康チェックや職員からの相談を受けているほか、24時間連絡できる体制も取っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の看護師の訪問と何かあった場合に365日24時間の連絡体制で助言など受け支援している。健康の記録という用紙を使って多職種のことが共有しやすいようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院先での聞き取りホームからの入院時連絡票を使いながら共有し療養に活かしている。今年は退院後、ホームへ戻られた例2件、医療ニーズを踏まえて退去となった例2件あり。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の在り方について、話し合いを行い事業所で出来る事、出来ない事を伝えているが地域の関係者には伝えていない。	現在の利用者は、介護度1の人が多く、利用開始時に、重度化や看取りの話はしていない。介護度3になった時点で、特養を希望する人には申し込み手続きを勧めている。また、看取りを希望する方には対応する方針で、随時、本人、家族、成年後見人と話題にしている。協力医や看護師との連携は可能である。以前には、多くの看取りを経験していたが、職員の入れ替わりもあり、現在、看取り経験のある職員は2名となっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練はできていない。職員によって理解度は違う為、訓練は必要である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中想定 of 火災訓練を行っている。火元がワンパターンであるためイレギュラーの場合対応できないと予測される。玄関から避難できない場合を想定した訓練を行う必要がある。ご近所2件は協力的である。	春秋の火災避難訓練を行っている。消防署からは火元や避難口をワンパターンにしないことを指導された。夜間想定 of 訓練も行っている。避難場所は玄関前から公民館さらには体育館となっており、これまで避難経路を使って避難場所まで行く訓練を実施しておらず、検討したいとしている。2階からの避難にはスロープが用意され、スプリンクラーも設置している。食料、飲料水は3日分以上を準備している。毛布など衣類も備蓄している。自家発電装置は保有していない。	2階にも居室があり、定期の避難訓練に加え、体操やリハビリの訓練もかねて避難口を変えたりしながら、「毎月ミニ避難訓練」を実施することをお勧めします。また、住環境から近隣との協力は欠かせないと考えられ、これまで以上に避難訓練への参加、協力の呼びかけを行うことが望まれます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念を基に人格を尊重し言葉遣いも気を付けている。プライバシーに配慮は、間取りの為会話が聞こえてしまうこともあり、意識することが必要。物忘れへや失敗への配慮し自尊心を損ねないようにしている。	ホームの暮らしの中で自分のやりたいことや希望することに取り組めるよう、「一人一人を尊重し、安心して生活してもらう」とする理念を支援の場で具体的に実践している。共有空間の居間は職員や利用者の会話の密着度が高く、職員は、プライバシーに関わる内容の話は極力避けながら、利用者の尊厳を傷つけるような話は慎むよう留意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定を大切にしている。指示するような形ではなく、できるだけわかりやすく説明し本人が決められるように支援している。職員主体の言葉か？利用者さん主体の言葉か？も考えながら支援している。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者さんをコントロールすることのデメリットや、やりがいにつながらないことを理解しながら、その人のペースや自由に過ごすことができるように支援している。職員によっての能力の差もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分から意思表示されない方が多く、職員が勧めて衣類の購入やヘアカット・カラーの希望を伺い支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立はない。普段の買い物で食べたい物を買いたい、作る時に何を作って食べるか決められるようにしている。「職員と一緒に」が前提ではなく、職員がいなくてもできることをやれるような支援を心掛けている。	利用者が調理を共同作業で行い、職員に同行して、3日分の食材の買い出しも行っている。職員は極力手を出さないようにしており、利用者は自分たちで好きなメニューを考え、3人程が中心になって調理を行い、季節により近くから露のとうや柿を取って来てメニューに加えるなど、食事の準備に関わることを楽しんでいる。職員は、一緒に食事は摂らず食事に時間のかかる人を手伝うことはあるが、見守りを中心に支援し、利用者に自分でできることは自分でとの理念の精神を実践してもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	普通の暮らしの支援を中心としているので栄養や飲み物の量はこだわってはいない。栄養不足、脱水、便秘にならない程度の感覚である。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で出来る方は本人へお任せ、自分でできない方は、入れ歯を預かり専用液に漬けている。声がけにより口を開けない場合多く口腔ケアはできていない。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	過剰なおムツにならないように夜と昼間の使う種類を変えている。その方のおトイレの時間で行くことができるようお手伝いしている。	全面介助が必要な人が1名いるが、殆どの利用者は、自立できており、全員が布パンツにパットで過ごしている。夜間はおむつの人1名を除き、自分で起きてトイレに立っている。ふらつきのある1名が離床センサーを使用している。ホームでは、現在の自立状態を維持出来るよう支援していきたいとしている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	動ける方には体操と飲み物・ヨーグルトを勧め、便秘が慢性化している場合は薬を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	大まかに午後の時間であるが、ご本人が入るかどうかが？何時に入るかを伺い、職員の都合にならないようにしている。	3日に1回、午後入浴を基本にしながら、本人の希望に沿って入浴してもらっている。幾日も入らない人や夜に入る人もいる。全面介助の1名、部分介助の2名以外の方は、健康たわしを使うなど、それぞれが自分なりの入浴の仕方を楽しんでおり、職員は、話の相手をしたりしながら、見守りを中心に支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	時間は決めず本人の休みたい時に休んでいるが、夜にあまり眠らず、昼に眠そうにしている方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全てを理解することは難しいが、分からない時は、書面にてすぐに確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割を作ることが前提だと押し付けになり得るので、思いや、やりたいことなど知りながら、普通の何気ない話なども大切にしている。普通の暮らしの中で家事をしたり、張り合いができたり笑ったりが大切なことだと考えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外へはよくでかけているが、スーパー中心である。スーパーへ行くことも大切だが、本人の希望にそった外出を増やして行きたい。	1人で外出する人が2名おり、後ろからそっと見守っているが、概ね近くを5分程散歩して戻ってくる。食材の買い出しに3日に1回程度職員と一緒に隣のスーパーに出掛ける利用者もあり、いい気晴らしになっている。また、季節のドライブは、軽自動車に1人しか乗れないので、数回に分けて桜見物や紅葉狩の他、白鳥の飛来地を見に出掛けている。利用者の希望に沿った場所にも出掛けるようにしたいとしている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	契約時にお金を持つ大切さを説明している。持たない人はできるだけ持つ、持っても無くしてしまう方もいるのである程度の取り決めの中で、どうするか相談して決めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話できるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	限りなく普通の家で普通の暮らしができる間取りやしつらえになっている。狭いからこそその利用者さん同士でのトラブルで心地よく過ごせない現状もある。	ホールが狭いため台所にも2、3人が座れる小テーブルを置いているが、どうしても密になり、笑いあり、ケンカあり、ソファの取り合いありで、賑やかな暮らし振りになっている。床暖房とエアコンを利用し、温湿調整にも気を配り、狭いながらも快適な空間になるよう配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	間取りが狭いため、気の合った人同士だけで過ごせる居間や台所の工夫に苦慮することもあるが、部屋を中心に過ごしたり、ある程度のバランスが取れている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	できるだけ馴染みのもの、大切なものを持ち込むことをお勧めしている。	各居室とも、エアコン、床暖房、ベッド、タンスが備え付けられている。衣類等は、持ち込みの小ダンスや衣装箱等で整理している。各居室とも、それ程持ち込み品は多くなく、あまり飾り立てることもせず、簡素で清潔な居室になっている。職員と一緒に自分の居室の他、階段等を掃除してくれる利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物の中は、わかりやすい、覚えやすい間取りになっている。できるだけ近代的な馴染みのないものはおかないようにしている。手すりもあり必要な方が歩きやすいようにしている。		